

一今、伝えたいー 『被爆の証言と、平和教育及び教育実践のいくつかの問題』



えぐさ ゆうじ
江種 祐司さん

広島県原爆被爆教職員の会会長
広島平和教育研究所研究員

◆はじめに

皆さんこんにちは。17歳の学生の時に被爆しました江種と申します。このような教研集会で講演するということは考えてもみななかったわけですが、今の時代を思って、少しでも皆さんにとって何かの役に立つならばと思って引き受けました。本当に恐縮しております。

資料1:「人間の生きる喜びこそ平和そのもの」

江種祐司

人間の生きる喜びこそ、平和そのものです。これは、被爆後、音楽で甦った私が実感したことでした。

私が生まれたのは1927年、昭和2年です。この年は金融大恐慌の年であり、翌3年は治安維持法による大弾圧の年。昭和4年は、ニューヨーク株式市場の大暴落からはじまった世界大恐慌の年でした。何とも言えない暗い時代でしたが、私の幼児時代はそんな時代背景と異なり、一家団欒の時を持ち、蓄音機でレコードを聴き、大人たちは黒い飲み物(コーヒー)を飲んでいました。7人の末っ子として生まれた私は、這いずり回りながらそのレコードを聴いて大きくなりました。父親は土木建築の仕事で、大正時代かなり裕福となり、革ジャンを着てサイドカーを乗り回していました。西洋

のクラシック音楽やオペラの曲など世界中のレコードを買ってきて聞かせてくれたのでした。野山を走り回るようになった頃、私はラン ラッラ ラン ランとあるメロディを歌っていました。のち、師範学校の先生の家で、オペラ「カルメン」の「闘牛士の歌」だったと知りびっくりしました。私はこの幼児時代の体験から、「音楽というものはよいもんだなー」という人間になっていました。

昭和6年満州事変、昭和9年父親が建てた小学校に入学。4年生の時、日中戦争が始まりました。しかし、そのころ耐え忍んできた土木建築の仕事は、大恐慌のあおりを受けなくて済むはずがありません。やがて倒産となり、田・畑・山すべての財産を売り果たし、膨大な借金を抱えることとなりました。どん底生活の始まりです。そこで、炭焼きを始め、その良質の炭を売ることによって借金を返していったのでした。したがって、小学校時代はその手伝いに明け暮れました。いつの間にか、蓄音機もなくなり、レコードも姿を消し、縁側の床の下にはサイドカーのとてつもない大きなチェーンがいつまでも残っていました。一家団欒など遠い夢となり、戦争と不況は、私から音楽を奪い去ってしまいました。

学校では、天皇のためいつでも生命を捧げる教育と共に、軍国主義教育が徹底的に行われました。音楽といえば、「君が代」を中心に祝祭日の歌で、歌う喜びな

ど持ちようがありませんでした。巷では軍歌が響き渡るようになり、やがて学校で重要な役割を果たすようになりました。歌われた軍歌は、野蛮で質の低い歌でした。人間は自由が奪われ、抑圧されていく時、人間性を喪失します。一つの方向にかりたてられていくとき、興奮状態となり、考えられないようなことをやってしまいます。人間が生きる喜びを持ってなくなり、自由な創造力をなくする時、真の芸術は生まれません。多くの軍歌は若者をかりたて、戦争を進める道具として作られ歌わせたのでした。

昭和16年太平洋戦争に突入。国民学校高等科2年だった私は、師範学校を受験する決意を持ちました。ピアノのレッスンがあり、すべての教科を学び、兵役免除、国費でした。昭和17年合格。全員が寮生活で、私は吹奏楽メンバーの部屋だったため、先輩とよく音楽の先生の家に行きました。しかし、師範学校生活を満喫したのは1年間のみ。昭和18年から真っ先に音楽と美術の授業がなくなり、兵器支廠に学徒動員。戦争支配者たちはウソをつきます。真の芸術は真実そのもの。芸術を極められたら真実を見抜く力をつけます。だから、支配者たちは芸術を排斥するのです。翌19年から決戦非常措置要綱に基づく学徒動員通年実施。日本中の学生は授業が無くなり、軍事基地に動員されました。私は金輪島に動員され、月月火水木金と軍隊の命令で、1年中休みなく働かされました。そしてあの巨大な原子雲によりその歴史は終わりました。

私の人生の最大の出来事はこの原爆投下。残酷な惨状です。8月15日、無条件全面降伏という敗戦の日を基点とし、戦前と戦後という画期的な2つの時代に遭遇することとなりました。戦後の師範学校は一変し、専門制となりました。私は全面的に音楽の単位と、美学・哲学を選びました。やりたいことが奪われていった戦前は終わり、自由にピアノが弾ける。レコードが聴ける。動員で節くれだった指をいたわりながら夢中で弾きました。

まもなく、原子砂漠と化した街、駅の南方に、音楽喫茶「ムシカ」誕生。音楽学生の子は毎日のように通いました。バロック音楽から現代音楽まで、10数年通いつづけ、コーヒー1杯で次々とリクエストしたのです。このムシカこそ、私の人生の黄金時代を築いてくれた所でした。オペラやシンフォニーの全曲を、解説つきで聴くレコードコンサートなどでは、あの峠三吉さんの姿も同じ部屋にありました。思い出だけで、今でも生きる喜びに心は満ちてきます。真の音楽は、戦争の中で、いつのまにか消えてなくなっています。そして、真の芸術、真の音楽は、平和そのものなのです。

◆ヒロシマ（私と家族のこと）

皆さんご存知のように、広島は世界で初めてアメリカのトルーマン大統領の命令によってテイクアウトという機長が原爆を投下し放射線を焼きつけられた街です。もちろんそれまで世界中どこにもこの事実はなかったわけで、最初の出来事です。

しかし、その時広島に住んでいた私たちは放射線というものを知りませんでした。放射線の恐ろしさも、原爆というものも全く知らないわけです。無知ですね。なので、この街の中を歩き続けました。したがってその生き残った人間の身体の中にも放射線が焼きついているわけでごさいます。すなわち私の身体の中にも放射線が焼きついて、そしてここ何十年来、私の身の上に様々なことを起こしているわけです。

まず端的に言いますと、今、皆さんどのように見ていらっしゃるかわかりませんが、私の目。残念ながら、何十年経ったときに放射線が私の目に襲いかかってきました。そして眼科に行きましたら、「いいよ始まりましたね。あなたの目は原爆白内障ですよ。このままにしたら全く見えなくなりますよ」と宣告を受けまして、びっくりして日赤病院に入院しました。まず先生の指導で右の目を手術し、今私の眼に挿入されているのは、人工の水晶体でございます。親からもらった水晶体ではありません。その翌年、左の目も手術しまして、両眼とも人工の水晶体がはまっているということです。

この放射線の被害というのは、5年間はずっと潜在しており、5年経ったら表に現れてくると言われておりますが、私の身の上も同じです。私が初めてびっくりしたのは10年後でした。

肺の中に空気がバアッと漏れまして、いわゆる自然気胸症という状況で、「2か月間絶対安静にしろ。ものも言うたらいかん」と言われました。私はじっと布団の上に寝転んで、2か月以上かかりました。「原因はなんですか？」と聞いても「わからない」と先生は言われるわけです。そういう出来事でびっくりしたのがちょうど10年後でした。

そして、白血球数が3,500を超えない。皆さんの白血球数は6,000～7,000ですね。私と同じように3,500以下の方がおられたら大変です。風邪をひいたら治らない、怪我をしたら治らない。私の娘は50数歳ですけど、なぜか私の白血球数より少ない2,500。低いときは1,500。だから風邪をひいたら治らない。そして今、甲状腺の薬をずっと飲み続けざるをえない。

一番私が残念に思ったのは、1997年のことです。私の息子は実は本川小学校の先生として39歳を迎えまし

た。その39歳の1月31日に、授業の後、大量の血を吐きまして、そして癌の宣告を受けました。2月2日に大学病院に入院し、大手術をしましたが、3か月と持ちませんでした。

この息子は、産院からつれて帰ってすぐ呼吸困難に陥った子どもです。日赤病院に担ぎこみましたら、胸腺というホルモンを造る器官があるわけですが、赤ん坊は、その胸腺が肥大して呼吸器を圧迫して呼吸困難に陥っていると言われました。「原因はわからない」と言われました。

助けてもらい、大事に大きくしていったのですが、入学式を迎える直前に今度は甲状腺がワアッと肥大して、アデノイドが口の中に肥大してどうにもならない。入学式どころではありません。そして、入院し手術を受けましたが、手術が始まりましたらお医者さんや看護師さんが走り回るわけですね。血が止まらない。血が止まらなかったら死んでしまうわけです。日赤の先生方が氷の層の中に息子をつけて、そこで手術をしてくれて助かりました。

それから後、小学校、中学校、高等学校、大学と大事に大事に大きくして、38歳を迎え体重が80kgを超えました。もう大丈夫だと思って油断しました。そのためにやられました。ホルモンを造る場所の癌です。またたくうちに全身に癌が蔓延して、そしてベッドの上で「酸素をくれ。酸素をくれ」と、のたうちながらこの世を去っていきました。これが私の最大の悲しい残念な出来事でありました。本川小学校は自ら希望して、親父の後を継いで平和教育をやるということで、本川小学校に勤めたんですね。しかし、残念ながらどうにもならない状況です。

私はお医者さんに訴えました。「私は被爆者なんだけれども」と言ったんです。けれど、やってくる先生は皆、「あなたが被爆者だからとかは、息子さんの病気とは関係ありません」と、どの先生も言うんですね。けれど亡くなった時、主治医の先生が「実は不思議なことがたくさんある。死体解剖させてくれ」と言いました。私はもちろん承諾しました。だけど死体解剖の後、私にわかる話は一言も先生はしてくれませんでした。

すなわち、放射線の被害と言うのはいまだにお医者さんも科学者もわからない。どのようになるかわからないんですよ、皆さん。これが今の人類の事実だと思います。誰にもはっきりとわからない。

けれど私にはよくわかるんです。私の身体に焼きつけられた放射線が、遺伝子を通じて私の息子を殺している。間違いありません。娘の状況を見ても遺伝子に影響するというのは間違いありません。放影研は未だに放射線は遺伝子に影響しないと書いておられますけれど、私は、これは全く嘘だと思っております。遺伝子に影響します。どのように影響していくかわかりません。けれど影響します。

◆ナガサキ、そしてフクシマ

そして2番目に放射線を焼きつけられた街は、もちろん皆さんご存知の長崎です。この長崎もアメリカのトルーマン大統領の命令によって原爆投下し、焼きつけられたわけです。3番目に焼きつけられた街はどこでしょうか？これは福島街々です。

この福島の街々に焼きつけた国はどこかと言いますとアメリカじゃない。日本国です。東京電力です。これが焼きつけたんです。私の尊敬する京都大学の小出さんという方は、「福島の第一原子力発電所の事故から巻きあがった放射線は、広島原爆の100発分を超えるもの(セシウム137等)が捲き上げられた」と言っておられます。私はこれ以上だと思いません。

皆さんご存知のように、ネバダでアメリカは1951年から何十回と核実験をやっておりますね。そして、ネバダの風下のユタ州の村は、5年、7年、10年後から癌に侵されて村が全滅するということが起こっているわけです。それに最初に気がついたのはお葬式屋さんでした。あの方もこの方もみんな癌で次々と亡くなると。結局、自分も癌で亡くなるのですが。小出さんは、「福島はそのネバダで実験した核実験の総量に匹敵する。しかもその総量より2割くらい多い」と言っています。

このことを私は、事実として途方もないことではないかと思えます。従って、福島の子どもの今からをものすごく心配しているわけです。もうしばらくしたら5年経ちますから。今もう既に、平常値の70倍の18歳以下の子どもたちが甲状腺癌にやられているわけです。データとして出ているわけですね。これを、日本国は公表しません。そして「被害はない、被害はない」と言っています。

皆さんも新聞その他で読まれていると思いますが、IAEA(国際原子力機関)は、1年9か月後でしたか、早速、福島にやってきて福島の原子力安全に関する福島閣僚会議というのを開いていますね。そして「安全だ」「心配はいらない」と。長崎の山下という学者は、「全く心配することはない。心配する恐怖心を持つことが一番危険なのだ」と、大変な言葉を発し、安全宣言をどんどん出したりしていくわけです。その安全のデータを出したのはICRP(国際放射線防護委員会)という組織です。これが、「福島の原発の被害はありません。心配することはありません。3日たった後はその被害はありません」ということを言い出したわけです。これは、本当に犯罪者だと思えます。

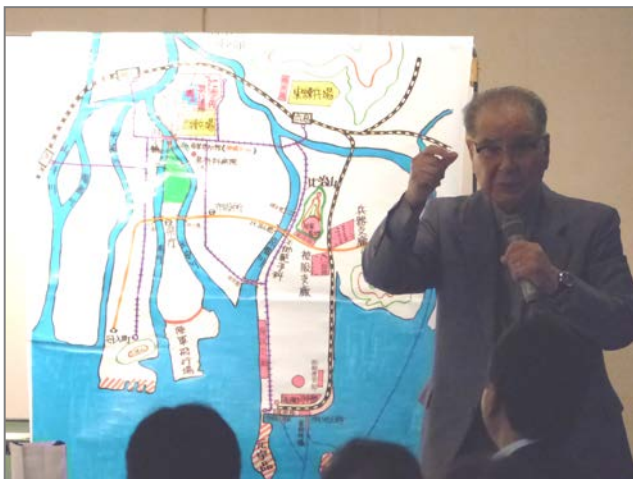
皆さんは、これから判断されていくわけです。今から5年経ち、10年経ち、20年経ち、今日、私が言ったことと彼らが言ったことのどちらが正しかったかが現れてくると思えます。今日、私の言うことが違うことを祈りたい

ですけれども、恐らく私の言う方向に展開すると思います。

皆さんは、福島原発があの放射線を巻き上げたことを「これは私には関係ない」と思ってらっしゃると思いますが、そうではありません。多いか少ないかの違いだけで、全ての日本人はもう吸っているわけです。だから私には関係ないとおっしゃる方があるとすれば、「それは全く違いますよ」ということを言いたいです。

福島原発は、そもそも1年も2年も死の灰をタンクの中に落としていくわけです。2年後くらいから今まで、そこを洗うということをやってきたわけでしょう？2年間は死の灰は全部落ちていくわけですね。だから、福島の上空に舞い上がったのはガス化したもの。だから小出さんは、セシウム137とおっしゃっているわけです。ガス化したものがバアッと巻き上がっている。その量がネバダの核実験の総量より多いくらいだと科学者は言っているわけです。皆さんは、それを信頼されるか信頼されないか。今からの報道によって決まってくると思います。

それからさらに、福島の街の中にある黒い袋、いわゆる放射性廃棄物です。あの黒い袋の名前はフレコンバックといって、今、福島県内に8万か所に置かれ、1か所に何百何千と積み上げられています。このフレコンバックというのは3年の耐用年数ですから、その中に入れられた草や木の種は芽吹いて袋から飛び出しているわけです。日本国は、この現実をどうするのでしょうか。大変なことです。



◆戦争の愚かさとヒロシマを教えること

私は先生方をお願いしたいのです。広島を教えるときに、放射能被害の問題が抜け落ちたら、広島を教えることにならないと思うのです。原爆教育にならないと思うのです。平和教育につながらないと思うのです。

広島市の平和教育の平和ノートを見ますと、それが落ちていくのです。佐々木禎子を教えることになっているのですが、佐々木禎子を教える時に放射線の問題は飛んでいって、無いのです。私はこれは平和教育にならないと思いますし、広島を教えるということにならないと思います。このことを私はまず、皆さんにお願いしたい。放射能被害が欠落した広島原爆教育は平和教育につながらないし、広島を本当に教えることにはならないということを私は言いたい。

今、私は小学生、中学生、高校生にも話をしていますが、「広島に原爆を投下した国はどこですか？誰が落としましたか？」と聞いても、残念ながらほとんど手が挙がりません。特に小学生の場合は手が挙がらない。たまに何人か挙がりますが。広島に原爆を投下したという時に、どこの国の誰の命令によって落としたのかということが抜きになった平和教育、原爆教育は、これも本物にはならないと思うのです。

先生方がそのことをはっきりと教えてくださるならば、子どもたちは「じゃあ、何でトルーマンは原爆を日本に落としたの？」と言うことになるんですね。質問が出てきます。そうすると先生方は「それは太平洋戦争中だったんですよ」という話をされると思うのです。「じゃあ太平洋戦争って何で起こったの？」ということになりますよね。先生と子どもたちが激論を交わすような授業を展開するならば、先生が「それは日本が真珠湾を攻撃したからだよ。それから太平洋戦争が始まったんだよ」という話にどんどん発展していきますよね。それが本物の平和教育ではないでしょうか。

だから、私は校長が何を言おうと修学旅行生がやってきた時にはっきりと言います。「アメリカのトルーマン大統領が命令をして、原爆が投下された」という話をします。校長さんが止めたことはありません。そして後から「ありがとうございました」と言われます。ですから先生方も遠慮なく、やられたほうがいいんじゃないかなど。この戦争の愚かさとヒロシマを教えることを教育のなから抜き去ることはできません。

資料3:「戦争の愚かさとヒロシマを教えることを
抜き去ることはできない」 江種祐司

20世紀、人間の尊厳をきわまりなく残酷な形で抹殺した歴史的な事実が2つあります。ナチスドイツのアウシュビッツと、アメリカ核戦略軍によるヒロシマ・ナガサキです。私は1人の被爆者として、ヒロシマを伝えるため、命あるかぎり証言しなければならないと思っています。日本国憲法も、教育基本法も、このヒロシマ・ナガ

サキの事実を見つめ、その心の深いところからいち早く制定されたことは間違いありません。

教師の使命は未来を創ること。ならばどのような子どもたちを育てて日本の未来を創るのが問われます。私は先生方に、特に若い先生方に訴えたい。戦争のおろかさ、ヒロシマ・ナガサキを教えるべき。

なぜならば、今や戦争のいきつく先は核戦争であり、核戦争が始まるならば人類は絶滅し、人類の未来はなくなってしまうからです。未来を創る教師の仕事の根幹に、何を取り去ったとしても、戦争のおろかさ、ヒロシマを教えることをめきさることはできないのです。

私は、17才の学生の時被爆しました。しかし、当時の私たちは、授業を1時間も受けることができなかったのです。軍需工場や軍事基地に動員され、絶対服従で1日中働いていたのです。1週間は月月火水木金金でした。「戦争に勝つまでは1日の休みも欲しがりません」と、軍歌とともに頭の中にたたき込まれたのです。軍服・軍隊の編み上げ靴・すね坊主まで巻き脚半・背中に鉄兜を背負って、頭に戦闘帽。すなわち、軍隊と同じ服装で働いたのです。もし今皆さんの子どもたちが、こういうことになったらどう考えますか。

1945年8月15日から、日本は、全面占領下におかれたことを考えたことがありますか。そして、半世紀にわたる侵略戦争・ファシズム・及び「死ぬことを教えた」戦前の間違った教育に対して、事実真実を知ることから、日本国憲法及び教育基本法により、「生きること、人間の尊厳を教えること」を自覚したのが戦後の教育なのです。

◆戦前の教育と戦後の教育

1938年(昭和13年)、国家総動員法が国会で制定されました。この国家総動員法から、私たちは大変な状況に入っていくわけです。そして、この国家総動員法から後、日本の中ではどういうことが言われたかと言いますと、「鬼畜米英」「一億一心」「鬼畜米英を撃墜しろ」という言葉が飛び交うわけです。現在も、「一億何とか」というのが出てきましたね。あの言葉を聞いたとたん、まさに、「一億一心」「鬼畜米英撲滅」これを唱えさせられたのがフッと頭の中に浮かんできましたね。

そして、私たちはだんだんと学徒動員を受けていきます。1944年(昭和19年)「決戦非常措置要綱にもとづく学徒動員通年実施要綱」というのがあります。私は、今日いらっやっている先生方にお聞きしたい。昭和19年4月から日本中の中学生、女学生、高等学校の学生、大学の学生たちはどうなったのか。修学旅行でやってき

た生徒に聞きますが、これも手が挙がらない。10数年前までは手が挙がっていましたが。

それはね、皆さん、昭和19年の4月から授業が1時間も受けられなくなったんです。では、いつまでか。昭和20年の8月15日まで、2年間に渡ってです。このことを先生方は忘れてはいけな、必ず子どもに教えるべきではない。それを具体的に教えると、戦争とは具体的にこういうことなんだということが、わかってくるということです。

私は広島湾の中の金輪島(資料8:地図①)という島に動員されました。私の学校は広島師範学校(地図②)ですから、そこから毎日、金輪島に渡り、この広島湾の中で仕事をしていました。そして「月月火水木金金」という歌が作られていました。でっかい声で歌わされて歩かせられ、軍歌を歌って頭の中に叩き込まれていきました。「私たちは戦争に勝つまでは1時間の授業もほしがりません」。これを叩き込まれたわけです。

ですから、県立二中の生徒がああ平和公園の土手で絶滅し、平和公園の東側の元安川の中で市立女学校の生徒が熱線で身体を燃やされて絶滅するということが起こってきているのです。そのことを私は、皆さんにぜひ教えていただきたいのです。1時間の授業もできない。「月月」ですから日曜日もないわけですよ。「金金」だから土曜日もないんですよ。そして、1週間毎日ということは1年中毎日ということなんです。お正月も盆もない。そこまで日本のあの当時の政府は国民を総動員していったわけです。「一億一心」をやったわけです。

「一億総活躍」、何を言っているのかわかって私は言いたくない。見え見えなんです、彼の頭の中が。何を考えているのか。すなわち、再び国民を総動員するというわけです。「国家総動員法」です。このことを私は怒りを持って話したいです。

そして、原爆が投下され、8月15日に降伏するわけです。全面占領下というのはどういうものか、皆さん、ぜひ考えてください。本当にもうお先真っ暗です。戦争には必ず勝つと思っていたわけですから。日本の国は「神の国」、天皇は神だと思っていた。これをはっきりと否定されたのがその翌年の昭和21年の1月1日です。天皇が「私は神様ではありません。人間です」と人間宣言をやったわけです。あの放送を聞いて、私はひっくり返るわけです。そして180度転回する。

すなわち私自身は「戦前の教育」と「戦後の教育」、この革命的なあの一線を越えて二つの、両方の世界の教育を体験することになったわけですね。

資料4: 歴史的経過		江種祐司
1938(昭13)		国家総動員法
1941(昭16)		太平洋戦争
1942(昭17)		広島師範学校入学
1943(昭18)		「学徒戦時動員体制確立要綱」閣議決定 「学徒出陣壮行会」举行
1944(昭19)	3.7	「決戦非常措置要綱」にもとづく学徒動員通 年実施要綱」閣議決定
1945(昭20)	3.18	「決戦教育措置要綱」(全国学生生徒を総 動員。学校における授業は昭20.4.1から 昭21.3.31まで停止する)
	8.6	原爆投下
	8.15	無条件降伏、全面占領下
1946(昭21)	5月	文部省「新教育指針」発表
	11.3	日本国憲法公布
1947(昭22)	3.31	教育基本法・学校教育法公布
	3月	文部省「学習指導要領(試案)」発行 新制中学校発足(6・3・3制)
	5.3	日本国憲法施行
	6.8	日教組結成大会 奈良橿原
1948(昭23)		広島師範学校卒業 広島市立第3中学校(のちに翠町中学校) 就職
1950(昭25)	6.25	朝鮮戦争 日教組「平和声明」(中央委)
1951(昭26)	1.24	「教え子を再び戦場に送るな」(中央委)
	11.10~12	「日教組教研全国集会」第1回 日光
1956(昭31)	3.13	「任命教委反対闘争」
	11.1	「勤評反対闘争」
1961(昭36)		広島市立鞆町中学校勤務
1962(昭37)	6.11	「学テ闘争」
1964(昭39)	1.15~18 秋	「日教組教研全国集会」第13回 岡山 「文部省全国教育研究集会」(広島県代表と して) 音楽教育の会入会 広島市音楽教育の会結成
1966(昭41)	10.21	スト突入(人事委員会勧告完全実施(ほか))
1969(昭44)	4月	広島県原爆被爆教職員の会結成
	7月	副読本「ひろしま」完成
1970(昭45)	8.6~9	ヒロシマ・ナガサキ被爆教職員の会 (全国教職員に「原爆教育」の始動を呼び かけ。全国の学校教育に「平和教育」を定 着させる起点となる)
1971(昭46)		広島市立段原中学校勤務 「原爆をどう教えたか」執筆
1972(昭47)	6月	広島平和教育研究所設立
1976(昭51)		音楽教育の会全国大会広島で初めて実 施(実行委員長)
1978(昭53)		「平和教育カリキュラム芸術領域」執筆
1980(昭55)		広島市立翠町中学校勤務
1981(昭56)	6月	「平和教育実践事典」執筆
1983(昭58)		「中学校教育実践選書」執筆 (全国編集 委員)全50巻中、音楽教育18巻・平和教 育35巻
1984(昭59)		ヨーロッパ3国へ(イギリス・フランス・イタリア)
1985(昭60)		ソビエト モスクワ(11日間)「第12回世界 青年学生平和祭典」名誉ゲストとして、石

		田明氏とともに招待される。被爆40周年 特別イベントとして世界の学生に被爆体 験を語る
1987(昭62)	6月	「原爆を許すまじ」音楽平和教材伴奏集 平研より出版
1988(昭63)	3.31	退職
1990(平2)		「平和教育実践選書 広島・長崎と東京空 襲」執筆 以後、被爆の証言活動

師範学校という学校は、全教科を徹底的にやる学校でしたが、戦後は専門制になって、私は音楽に熱中して音楽の教科をとりました。

昭和22年、私が学校に就職する前の年、「教育基本法」「学校教育法」「学習指導要領」が発表されるわけです。私はぜひ皆さんに読みあげたいと思って資料を持ってきました。「学校教育法」が何を言っているか、どういうことを日本国全体に訴えたかということ、読みあげさせていたきたいのです。

まず、「指導要領」の方を読みあげます。昭和22年に最初に指導要領が試案として出されました。そこにこう書いてあります。

これまでの教育では、その内容を中央で決めると、それをどんな所にもどんな児童にも一様にあてはめていこうとした。だからどうしてもいわゆる画一的になって教育の実際の場での創意や工夫がなされる余地がなかった。このようなことは教育の実際にいろいろな不合理をもたらし、教育の生気をそぐようなことになった。しかもそのようなやり方は、教育の現場で指導にあたる教師の立場を機械的なものにしてしまって、自分の創意や工夫の力を失わせ、そのために教育に生き生きした動きを少なくするようなことになり、時には教師の考えをあてがわれた事を型どおりに教えておけばよい、といった気持ちにすることになった。

と言っているわけです。

「新教育指針」というのは、もつと率直に皆さんに訴えるものになると思います。第五章の五項のところで「教師自身が民主的な修養を積むこと」とある。

生徒を民主的に教育するためには、まず教師自身が民主的な修養を積みねばならぬ。それも理論や観念としてではなく、教師の生活に結びつき、実行を通して修養することが必要である。学校の経営において、校長や二三の職員の独り決めで事をはこばないこと、すべての職員がこれに参加して、自由に十分に意見を述べ協議した上で事を決めること、そして全職員がこの共同の決定にしたがい、各々の受け持つべき責任を進んではたすこと。これが民主的なやり方である。このような学校経営そのものによって教師は民主的な修養を積むことになるのである。教員組合の健全な発達もまた教師の民主的な生活及び修養のために大切なことである。教員組合は団結の力をもつ

て、教育の正しいありかたと、教師の身分の安定とを保障しなければならない。もとより教師といえども政治に関心をもつべきであり、偏らぬ立場にありながら、諸政党の動きには十分な注意をはらい、事に応じ機に臨んで、よいことはよいし悪いことは悪いとする有力な意見を述べ、政治を正しい方向に指導しなければならない。教員組合がこうした意味で勢力を増してゆくことが健全な発達であって、それはただ教育者だけの幸福ではなく、国家のために大きな奉仕をすることになるのである。

こう言っているのですよ。これを、もう一度我々は読むべきだと思います。文部省はこういうふうスタートしているのです。今は、どれだけ文部省がゆがんでしまい日本の子どもたちを痛めつける存在になっているかということが、これを読んでいただければ一目瞭然ですね。

私はこういうものが出た後、昭和23年に広島市の第三中学校、現在の翠町中学校に就職しました。翠町中学校はガラス窓がありませんでした。廊下は波になっていますし、柱は折れていますし、そういう学校でした。

しかし、自由でした。本当に私は自由な音楽教育を実践しました。外林校長さんというのが、教員組合の執行委員長をやって第三中学校にやってきた校長さんだったんですね。その時は執行委員長をやった人がどんどん校長になっていったわけですから。その外林校長が、「無理やりあんたを引っ張ってきたから、やりたいことをやってくれ」と言ったので、私は「オーケストラをやりたいから楽器を買ってくれ」と言ったんです。昭和23年ですよ。そうしたら、その外林校長は楽器を買ってくれたんです。バイオリン、チェロ、コントラバス、トロンボーン、次々と買ってくれたんです。ただし、その当時は竹製のバイオリンでしたけれどもね。

私は、もう有頂天になってオーケストラをやりました。その中で子どもたちが生き生きと活動を始めました。授業もオペラを全曲聴かせるとかね、1時間じゃすまないわけですから、他の先生と協力してやり取りをして、2時間続きの音楽の授業にしてオペラを全曲、話をして聴かせて、と自由な実践をやりました。

その10数年間、昭和36年代の中頃までの間に卒業した生徒は、本当にすごいことになりました。バイオリン、ピアノ科、声楽科で今の芸大にどんどん入学していったわけです。そして、今でも世界で活躍してくれています。今ドイツに住んでオペラ歌手をしております子ども、広島交響楽団をつくりあげた子ども、芸大のバイオリン科を出て室内楽団を結成し、放送でも活躍して上野精養軒の跡継ぎになった子ども、そういう子どもがどんどん出てきました。そして、たくさんの子どもの先生になりました。その中のひとり、広島の音楽科を卒業後、広島県

の中に3つのオーケストラを作ってくれました。府中市の府中高校、安芸高校、広島の付属高校、と3つのオーケストラを作ってくれました。

このことを通して、私は「教育実践は自由でなくてはならない」と思います。皆さんが自由に教育をされないと、本物の教育はできない。どこかに枠をはめられたらそれまで。ですから、私は皆さんに絶対に枠をはめてほしくない。自由に教育実践をやっていただきたい。私はその考えでずっとやってきた。

もうひとつ言っておきたいのは、岡山であった第13次教研。私が最初に参加した全国教研です。それから50数年間、教研に参加しなかった年は1年もありません。私はその年に文部教研にも参加しました。文部教研というのは指定されて参加する。両方の教研を見て、どちらの教研集会が本物かというのが、一目瞭然でわかったわけですよ。

すなわち、文部教研はもう行き詰まってしまって無くなっていますよね。今はもうやっていません。日教組教研は続いているわけです。なぜか？自由を持っているからです。だいたい束縛されていますけれども、まだ自由を持っている。自由がなくなってしまうたら文部教研と同じになります。ですから、その自由を持たなかったら子どもたちが不幸になる。私の実践で私ははつきりと言えるわけなのです。

◆ヒロシマを語る(被爆体験)

(1)原爆投下・核爆発10秒間の衝撃

これ(資料8)は、広島原爆が投下された時の地図です。緑色が平和公園(地図③)です。平和公園の一番北の端に相生橋(地図④)があるというのはご存知ですね。その隣に産業奨励館(地図⑤)という建物がありました。産業奨励館という建物は、ドームのところは5階建てになっておりまして、3階の建物がぐるっと回った中庭のあるモダンな建物でした。玄関から入って一番奥まで行きますと、3階にらせん階段がありました。真っ赤なじゅうたんが敷かれていて、とてもきれいな建物でした。3階に上がって美術展なんかにたびたび行きました。緑色の屋根は銅版の屋根です。原爆投下により、上から熱線でまたたくうちに燃えて、溶けて、そして何トンという圧力でクワァーと押しつぶされて飛び散っていきました。これが今、皆さんがご覧になっている原爆ドームでございます。

そのすぐそばに赤い丸を書いておりますが、島外科病院(地図⑥)という病院がある。ここが爆心地です。壊滅しましたが、復興して今建っております。

当日、相生橋から北東の山の上に、3機のB29が1万mを超える上空から侵入してきました。1万mを超え

すと、高射砲も弾は届きませんし、撃ち落とされる心配はないわけです。戦闘機が飛び上がっても戦えないわけですから、悠々と敵の陣地のまっただ中をやってきました。先頭を飛んできたB29の同体にはエノラ・ゲイと書いてありました。機長のティベッツが飛び立つ前にペンキで自分の母親の名前を書いた。母親というのは命を生み出す人ですけど、彼は何を思ったのか知りませんが、母親の名前を掲げて飛んできました。

そのエノラ・ゲイは4個のプロペラ機でしたけれど、ここでプロペラを全部止めまして、相生橋をめがけてキューと急降下しました。8,500mのところまで降下しますと、相生橋がティベッツの目に見えるわけですから、ティベッツはトーマス・フィヤビーという部下に命じてボタンを押させる。そして、パッと広島原爆が落ちてくるわけですね。

資料5: 広島県産業奨励館と旧相生橋 四国五郎



資料6:「組写真 ヒロシマ・ナガサキ」



広島 撮影：1945年9月下旬 / 松本栄一
焼けのはらとなった広島 — 爆心地（原爆ドーム）付近から南を望む。

広島原爆は皆さんが資料館の中でご覧になっているように長さが3m、直径は70cm、重さは4t。これがパーツと落ちてきました。相生橋をめざして落としたわけですけど、外れて、シューと垂直になって島外科病院の真上567m上空まで落ちてきました。43秒後、白いアンテナが作動する仕掛けになっておりました。

43秒というのは、このエノラ・ゲイ、そして通信機材を積んできた2機目のB29、写真を撮影する任務でやっ

てきた3機目のB29、この3機とも全速力で遁走し、安全なところまで逃げていくことができる時間です。彼らは、安全なところまで逃げていきました。その時、アンテナが作動し、567m上空からこの直下に放射線を焼きつけたわけです。

科学者は100万分の1秒と言っております。100万分の1秒で、爆発をしないまま頭の部分から焼きつけていくわけです。放射線の中身は200種類以上あるのですけれども、そのもっとも強力なものは、鉄筋コンクリートだろうが、地下室だろうが射貫いてしまいます。直下の人はもう、放射線によって生きることはできません。そして同時に、ウランウム235が詰め込まれているわけですから、それが核爆発をします。科学者は、光球ができたと言っています。直径20mの光球が3秒間にわたってできた。その20mの光球の中心温度は250万度、表面の温度は30万度を越えたと言っております。太陽の何倍、何十倍という温度にあたると思います。その熱線がパーツと広島の街の上に広がったわけです。この光球の3秒間、端的にいきますとね、ピカツという、この皆さんが3つ数える時間、そう考えてください、ものすごい光がピカツと光ったわけです。

放射線というのは、まず熱線と爆風圧に急激に変化するわけです。すなわち放射線というのは、イコール熱線と爆風圧です。爆風圧がパーツと行くわけですから広島の街のあらゆるものがメチャクチャに破壊されました。皆さんは信じられないと言われると思いますが、広島の街のあらゆるものがメチャクチャに破壊され、飛び散り、ひん曲げられ、叩きつけられ、ちぎられ、捲き上げられ、舞い上がり、川の水まで舞い上がり、ウファーとメチャクチャになりました。3秒間でそんなことになるわけないと、皆さんはこの世にありえない話として聞かれると思いますが、事実でございます。私はこの目でその姿を見ているわけです。

そして、この光球はその後、パーツと広がって火球になり、7秒間にわたって310mの直径の大火球になります。皆さんが資料館に行かれたら模型の上に赤い玉がぶら下がっていますが、あの赤い玉が火球です。直径310m、高さが567mということです。そしてあの火球は、表面の温度であっても6,000度であったと科学者は言っております。

6,000度というのは鉄が溶ける何倍もの温度です。すなわち、30万度から6,000度にいたる温度がパーツと広島の街の上に広がっていくわけですから、10秒間で、この広島の街は燃えるものは全て自然発火します。誰もマッチで火をつけないんだけどパーツと燃えていく。

その熱線、爆風圧によって叩きつぶされ、吹っ飛んでいった建物の下敷きになり気絶してた人が、気がついて這い上がってきますけれど、街が燃えているわけですから、反対の方向、つまり燃えていない街の外に向かって逃げていきます。逃げていくんだけど、炎がバアーツと追っかけてきます。

家の下敷きになって、そして骨もあばら骨も折れているというような人がどうやって逃げていったと思いますか？あらゆる人が、自分の身体が動く限り逃げて行ったんです。私は救援活動の命令を受け、そのコースをたどっているの、歩いていく間にその逃げていく人々を見るわけです。

炎が広がると同時に外にいた人はどうなったかと言いますと、熱線をあびて皮膚や肉がビブテキのように煮えたぎり、燃えた身体のまま吹っ飛んでいくわけです。吹っ飛んでいって叩きつけられるわけですから、叩きつけられた被爆者はあばら骨が折れるし、手は折れるし、足の骨も折れます。それでも立ち上がって逃げていきました。足を引きずりながら、四つん這いになりながら逃げていったわけです。逃げていく途中、炎の下になった人は真っ黒焦げに焼き尽くされ、どんどん中心地点から人々が殺されていきました。

その事実を私は皆さんに知っていただきたいと思って、ここに1枚の写真(資料7)を貼らせていただきました。これは、10月2日でございます。8月6日に破壊しつくされ、燃やしつくされ、人々は殺しつくされた。そういう街になったありのままの姿を、東西南北全部写している写真です。皆さん、よくご覧ください。八丁堀の、今は三越のデパートが建っていますけれども、そこが実は中国新聞社の社屋でした。西には、己斐の後ろの山。南には、似島の山が写っております。東には、比治山が写っております。北には、広島駅の後ろの二葉山が写っていますね。

資料7:旧中国新聞社屋上から 林 重男 撮影
(南)



山のふもとを皆さんご覧ください。メチャクチャに破壊されて黒焦げに燃えつくされております。ありのままですよ。これは、描いた絵ではありません。これが原爆というものです。ただ、この写真は小さい写真ですから、ここに真っ黒けの亡骸が転がっているということは、皆さんにわかっていただくことができないので、これは言葉で言っておきます。10月2日のこの地面には、いたる所に黒焦げの死体が転がっているという状況だったということを知っていただきたいのです。

こういう核兵器で、彼らは相生橋を狙ったんです。相生橋はなぜ大事な橋かと言いますと、この周囲に広島市民が集中して住んでいたわけです。この中島本町は広島一の繁華街でした。そういう密集して住んでいる真っ只中に、彼らは原爆を投下したわけですね。これを許すことはできません。誰がなんと言おうと私は許すことができない。これを許したら人類が絶滅してしまいます。

私はその後、きのこ雲を見ました。12,000mまで、またたくうちにバアーツと広がっていく。そして、ぐいぐいぐい広がっていく。その広がっていく雲が広島街を覆っていった、真っ暗くなったんです。真っ暗くなった時に温度が下がりました。その時に、黒い雨が降ったんですね。私がいたところでは黒いものが落ちただけでしたけれども、広島北と西には黒い雨が豪雨のごとく降ったわけです。放射線が濃く濃く溶け込んでいるあの黒い雨、その降ってくる黒い雨を手ですくって飲んだ人がいます。ですから、怪我をしていなくても、その黒い雨によって竹やぶの側に次々と転がっていくという状況が起こったわけです。

そして、こういう核兵器をなぜ許したらいけないか。なぜ許したら人類が絶滅するか。この言葉を私が言っていると聞いていただいたら間違いです。8月6日前後、平和公園や国際会議場にやってくる世界の優れた科学者が、異口同音に私たちに呼びかけています。

(西)

それはそうです。彼らは、相生橋に原爆を投下したわずか9年後に広島原爆の放射線の1,000倍を超える水爆を作って、ビキニという島で実験しました。

彼らがつくった水爆の原子雲は、100kmです。100kmといったら広島から福山まででしょう。広島から福山までの直径の原子雲がここへ舞い上がったとしたら…それを実感として考えてください。あのビキニ海上に100kmの柱の雲が舞い上がり、黒い雨を降らしたわけです。私が見たこの入道雲は12,000mまで舞い上がりましたが、水爆はそんなものじゃない。1,000倍を超えるのです。

彼らが持っている現在の核兵器は、原爆の数千倍です。この核兵器を使って戦争をするならば、人類は絶滅する。そうでなくてもこの地球上に今、舞い上がっている放射線がどのようになっているのか、皆さん、考えてみていただいた事がありますか？ こういう問題を考えないで原発を稼動するなんて、本当に愚かにもほどがあると思います。それを平気でやる。

日本に最初に原子力発電所を作ったのは、安倍晋三の祖父の岸信介です。岸信介が命令して作っているわけですから、その孫が原発を推進していくんでしょね。これほど愚かなことはないと思います。すなわち知らないんです。勉強してないんですよ、広島がどんなものか。資料館にも来ていない。平和公園には来るけどさっさと帰ってしまう。そんな人間にはわからないですよ。

(2) 軍事基地、金輪島での被爆の瞬間

その当時の私たちの服装は、軍隊の服で、すねぼうずまで巻脚絆、お粗末な布の戦闘帽、そして、鉄兜を背中に背負っております(資料9)。これで夏と冬も全部同じですよ。夏は下に何も着ていない、冬は着ている、それが違うだけ。この軍服を脱いでこの辺に置いたらビンタ

がくるわけですね。すなわち天皇が下賜したものですから、それを粗末に扱ったらビンタがくるわけです。

資料9: 当時の服装 江種祐司



そして、どういう仕事をしたかと言いますと、木造の船をもらい、自分たちで運転をしました(資料10)。そして、どんな物を運んだかと言いますと、ドラム缶、砲弾の弾、高射砲の弾、機関銃の弾、小銃の弾などは木箱の中へ整然と入っています。そして、ロープ、軍隊の服、靴、毛布、こういうものを運びました。一番私が嫌だったのはドラム缶でした。

ここが広島駅(地図⑦)で、ここが軍港宇品港(地図⑧)です。今からちょうど121年前、明治27年に鉄道が広島に延びてきました。8月1日に日清戦争宣戦布告されて、その4日後から広島市民を集めて軍用鉄道宇品線(地図⑨)というのを架設し、日本中の陸軍を広島に集めて、この東練兵場(地図⑩)に整列させて、汽車に乗せて、宇品港に送り出して輸送船に乗り込ませたわけです。その兵隊と一緒に兵器、弾薬、服、靴、毛布、食糧。この3つの拠点がありまして、それらが一緒に送り出されたわけです。

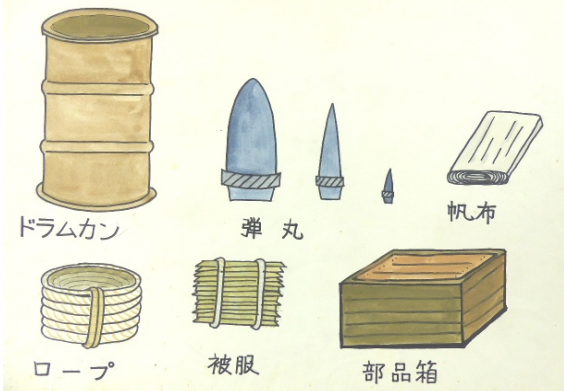
(北)

(東)



(提供 広島平和記念資料館 作成 Ari Beser)





私たちが学徒動員を受けた昭和19年は、B29が1万mを超えた高度で飛んできていました。シューと爆弾を落とすんですけれども、街の中には一発も落とさないんですよ。私たちが働いているこの広島湾の中に落とす。特に、この金輪島は野戦部隊の本部で、私たちは、その直属の学徒動員生ですから、金輪島にはたびたび爆弾が落とされました。

弾薬を運ぶ途中、海の上に落とされる。目の前でパーッと炸裂する姿をたびたび見るわけです。もう本当に恐怖ですよ。何のためにこの広島の街に落とさなかったのか私にはわかりませんでした。軍隊の上層部は、この弾薬庫に落とされたら大変なことになるのはわかるわけです。私たちに命令をして、弾薬を汽車に乗せて運んで、船に乗せて似島の弾薬倉庫に運び込ませました。それから、被服支廠(地図⑪)の靴、服、毛布を運んで船に積んで、鯛尾、金輪島、元宇品、似島、峠島に掘られている洞窟の中に運び込む。運び出して輸送船に積み込む。こういう仕事をやっていました。

8月6日当日、私は金輪島に到着して上陸すると、すぐ学生の控室の中に入って、お茶を飲んでいました。その時に左のほっぺたに熱線が「熱っ！」というふうに届きました。ここは爆心地から直線で6km 離れておりますけれども、山がありません。左のほっぺたは、ちょうどガラス窓の方向でした。そして、目の前をいろんな色が混ざって、カーッと渦巻きました。そして、圧力がグワァッときたので、私の左で爆弾が炸裂したのだと思いました。そこま

では記憶があります。それからはもう思い起こせません。

気がついた時には、長机の下にしゃがんで鉄兜をかぶってじっとしていました。物音が全部消えてなくなってます。金輪島は民家が一軒もない、島全体が軍事基地だったんですけど、工場が動いている、造船所が船を修理している、海岸線には起重機が並んでいる。いつもものすごい音が出ていたわけですけども、音が聞こえてこない。静まり返っていたわけですね。

私は不安になり、すぐ軍隊の服をなぞっていきました。ベトツとしたものが手につかない。助かったと思いました。けど、何事か、大事件が起こっているわけですね。お互いに声をかけ合い、南側に一つしかない出入り口に向かって出て行きました。

鉄兜は重たいものだから、持ち上げている。私の前の友だちの後ろ頭から、血がグラーッと流れているのを見て、私が「お前、血が流れているぞ」と言いますと、後ろから「お前も流れているぞ」と言われました。「えっ」と思ったら血がいっぱい出ていたんです。私たちは親指を耳の穴の中に入れて、四本の指で目を押さえて伏せたんですけども、戦闘帽は吹っ飛んで、後ろ頭にガラス片がバァッと飛び込むという状況になっていたわけですね。

そして、広場に出て、原子雲を見た。「これはガス会社のガスタンクが全滅した」「いや、兵器廠の弾薬が全部爆発した」、色々言いましたよ。けれど、違うってすぐわかるわけです。みんな放心したように口を開けたままその雲をずうっと見ていました。

しばらくたった時に広場で異様な声をする。見ますと、真っ白なブラウス、黒いモンペの女学生の胸に、ガラス片がパーッと突き刺さっている。血が川のように流れてぐたっとしていました。

その女学生たちは、ミシンがずらっと並んでいる倉庫に座って軍隊の服を縫っていたわけです。彼女たちの前の窓ガラスは、でっかい窓ガラス。それがミシンの上から彼女たちの胸に容赦なく突き刺さった。

これが皆さん、6km 離れた直後の金輪島の姿でございます。

私たちは、すぐ命令を受けました。「学生たちは直ちに学校へ帰れ」。18歳になったら私たちは戦場へ出るわけですから、17歳の男子は大事な兵士。だから軍隊は「学生たちは直ちに学校へ帰れ」と命令するわけね。それですぐ学校に帰りました。当時は全員が寮生活でしたけれども、寮の建物も学校の校舎も屋根は吹っ飛んでますし、柱は折れてますし、そして、廊下は波になってますし、ガラスの破片が部屋中に突き刺さっている。

「運動場の土の上に待機しろ」と先生が言われました。運動場といっても、その当時は小学校から大学までサツ

マイモが植わっているわけですから、その通路に腰を下ろして待機する。

しかし、いつまでたっても先生たちが来られない。それはそうです。先生の中にも即死、家が倒壊、火災、家族が全滅、大火傷、大怪我、そういう先生がいっぱい出られるわけですよ。てんやわんやなんです。ですから、私たちに命令する余裕がない。

やっと少人数の先生が出てこられて、私たちをグループ編成して、「お前たち3人は直ちに舟入町(地図⑫)の先生の家へ救援活動にいけ」と。

私たちは、鉄兜をかぶってすぐ出発しました。

(3) 東雲町から舟入町への救援活動

出発した途端に、学校の所まで逃げてきた人が目に入った。みんな真っ黒けの服装。戦争中は男性はみんな丸坊主ですから髪の長い人は女性です。必ず汚い髪をしている。黙りこくつてもを言わない。私たちはこの姿を見た時に言いました。「こりや大変だぞ」。しかし、街の中で何が起きているかわからない。知らないわけですから、しゃべりながら前に行きました。

軍用鉄道宇品線の辺りに来た時に、私たち3人も真っ黒けになりました。顔や首筋は汗が流れている。火の粉や灰が飛んできて、いつのまにか真っ黒けになっているわけですね。服は汗がにじみ出てますから、そこにへばりついている。鉄兜の上には灰が積もっている。

この頃、私たち3人は、ものを言わなくなった。ものを言わなくなったのではなく、ものが言えなくなったのです。

資料11:「組写真 ヒロシマ・ナガサキ」



広島 撮影:1945年8月6日午前11時30分ごろ / 松重美人
生き地獄の中をのがれてきた人々ー 爆心地から南南東2.3kmの(御幸)橋西詰めで

歩けない人はここまで来られません。その途中でもう亡くなってしまふわけですね。この辺りの人のことを、私たちは「歩いていた」と言わない。「うごめいていた」って言うんです。うじ虫がウワウワウワウワどっち向いて動くかわからないような動きをするのをうごめくと言いますよね。逃げていく人たちが、うごめいているわけです。その姿は私の目の中

に焼きついています。忘れようとしても忘れることはできません。

爆心地辺りの人のあの姿を、私は思い出したくない。だから、原爆なんかもう思い出したくないという人間になりました。一言もしゃべらない。親が聞いても絶対にしゃべりませんでした。しかし、1970年を迎えた頃から、私は原水禁世界大会に参加するようになって、そして、静かに180度変わったんです。ですから、今、皆さんに話している。話さなきゃいけないという人間になりました。

燃える街の中を歩き、「水をください」と言っても水は誰もくれない。歩き続けたら足は「く」の字になります。そして、力が弱くなったら、「く」の字が急激になって、そして座り込んだら、もう命は切れる。そういう人がいっぱいいたわけです。「く」の字になった人は、燃える街の中から出てきて、京橋川(地図⑬)から東は燃えてないわけですから、早くそちらへ逃げようとしている。「く」の字になった人が足を運ぼうとしたら、うごめかざるを得ません。例えば、左の足を前に出そうとゆつりとうごめいたら、ちよつと前に出ますでしょう。今度は、右から左にうごめいて右の足をちよつと前に出す。必死でうごめきながら、足を前に運んでいるんです。

女の人は、長い髪に頭の皮膚と肉をつけたまま、うごめきます。耳は溶けてなくなっていますから、髪がズルッと流れてきて、止まってへばりついてるんです。汚い髪がぶら下がって針金のようになっています。肌は赤剥けです。そして、服は焼き切られている。そして血が流れている。だから、身体は真っ黒けで、裸同然。女性が裸同然で逃げるなんて、恥ずかしさに耐えられないと、皆さん思われますでしょう。でも、どうすることもできないんです。

そして、背中や腕の皮膚や肉がビフテキのように焼かれて、反り返っている。重みがあつて痛いんですよ。痛いから、両腕を前に出してその痛みを何とかしようとする。だから手を前に出すんですよ。

指に力が入らないので指は動かない。指が動くのなら自分の身体を制御しますけれども、それができないんですね。誰かがヒュッと腕に当たると、この辺のものがズルズルッと下がってくる。ですから、爪を基点として、指の先へダラッとぶらさがってくるわけです。そういう姿をした女性が、必死に早く逃げていこうとうごめいている姿は、私のこの目の中に焼きついています。かき消すことはできません。

写真(資料12)のこの向かって右側の方の背中をご覧ください。皮膚や肉がビフテキのように煮えたりしています。このように自分の身体が燃えていくなかに、皆さんだつたらどうなさるか。水を見つけたら、たぶん飛び込んでい

かれると思います。

だから、私たちが比治山橋(地図⑭)の所にやって来たときに、この京橋川の向こう岸に、頭からボンと川に飛び込んでいる人がいるわけです。頭から飛び込んでいますから、足は上に向いている。けれど、もう上がっていく力はないわけですから、飛び込んだ途端にそのまま息途絶えてしまう。だから足が上を向いた人が向こう岸にいっぱい居るわけです。

資料12:「組写真 ヒロシマ・ナガサキ」



広島 撮影:1945年9月 / 木村権一(アメリカ返還写真)
熱線で着物の柄が膚に焼きついた

広島 撮影:1945年8月7日 / 尾糖政美
強い熱線で背中を焼かれた婦人



水がなかったら苦しいからうめき声を出します。こういう人は、後ろには絶対に倒れません。前に四つんばいになって、そして、苦しいからうめき声を出しているんです。そのうめき声は、口からじゃない。四つんばいになった身体全体から何とも言えないうめき声を出しているんです。この姿も私は忘れることができません。

男性らしき人がいる。その男性は前から爆圧をバアーと受けて眼球がブシューとつぶされて、ぶら下がってるんです。そして、顔中から血が流れています。顔中から流れている血は赤くなく、真っ黒けなんです。黒いものが顔中からダラーッとぶら下がっている。赤いのはぶら下がっている先のほうだけ。

人々が動く音を聞きながら、自分も遅れないようにしようと思って、目が全く見えない人も必死でうごめいている。こういう姿を見ていくわけですね。

私たち3人は、だんだん狂ったようになりました。そして、比治山橋まで来たときに、ここから先はもう行けないと正直思いました。けれども、戦争中にいったん命令を受けたら、私たち師範学校の生徒が元の学校に帰るなんて許されません。3人で橋を渡りました。

そこまで土の道路だから良かったけれど、橋の向こうはアスファルトで溶けてしまっている。電柱がパタパタと倒れている。電柱というのは並んでますでしょう。戦争中の電柱は木材ですから次々とメラメラ燃え上がって、そこに電線が巻きついている。

私たちは燃える街の中を歩きました。理由は二つあると思います。一つは、爆風圧で家が吹っ飛んでいき、鉛の水道管が引きちぎられ、斜めになった水道管から噴水が出ている。その水が落ちているところは火が燃えていないので、3人ともそこにしゃがんで、ずぶ濡れにするんです。そうやって行くだけけれども、またすぐ身体が乾くから、次の噴水でまたずぶ濡れにし、そして行く。もう一つは、中学生や女学生が家を倒して広い広場(疎開地)を造っていた。その疎開地の中には、炎が舞い込んでこないところがあるので、そこを通る。

一番近いところでは、爆心地から1.2kmの所を通りました。市役所の南、県庁の北側。家がペシャンコになって火の粉でパツパツしている。その辺りを通るときに目に入ったのは、黒焦げの死体。この黒焦げの死体は、固い炭に焼かれています。ハンマーで叩いても欠けないと思います。

この写真(資料13)は人の姿をしています。あの辺りを通るときに私たちの目に次々と入ったのは、こういう人の姿をしていない、異様な黒焦げの固まりなんです。無数に目にしました。この方は、生きたまま焼かれたってことを証明しています。口をパクッと開けてますでしょう。生きた魚を焼かれた経験のある方は、わかりますね。生きた魚を焼いたら口をパクッと開きます。この方は、生きたまま焼かれているわけですね。

資料13:「組写真 ヒロシマ・ナガサキ」



長崎 撮影:1945年8月10日 / 山端甫介
炭のように黒こげになった少年 — 爆心地から南南東約700mの焼けあとで



長崎 撮影:1945年8月10日・爆心地付近 / 山端甫介
死者と生者と — ナガサキは終わっていない — ぼうぜんとして立ちつくす女性の後ろに焼死体が横たわっている

どちらに向かって行こうかなと思って立ち止まります。すると、もう息絶えて倒れていると思った人の真っ黒い手が、私たちの足にキューと向かって伸びてくるんですよ。こちらから伸びてるなどと思ったら、こちらの方からも必死で伸びてくるんです。すなわち、私たちの足首を捕まえて「水をくれ」と懇願したいんですね。だけど、その伸びてくる手を、私たち3人は編上げ靴で払いのけるんです。「水は飲ましたらいかんぞ」と、一滴の水も飲まさない。手を払いのけて前へ前へと行きました。3人とも狂ってしまった。

そして、どのような救援活動をしたかよく覚えていません。夢遊病者のようになって、学校に帰りました。

学校に帰った時に先生が言われた言葉を不思議に覚えています。「土の上に寝ろ」と言われました。私たちは、学校の側の葡萄畑の中に入って横たわりました。何時かは、わかりません。

横たわりますと、葡萄の房がぶら下がっており、熟した粒が見えるわけです。その熟した粒を採って食べました。3人とも次々と採って食べるんです。先生になろうとする学生がお百姓さんの葡萄を盗んで食べる。その話を聞いて友だちも入ってきて、たくさん友だちが次々と葡萄を盗んで食べて、結局、この葡萄はなくなってしまった。

だから戦後、広島師範学校は、お百姓さんに葡萄代を弁償しました。そういうことがありました。

(4) 川土手で死体を焼く

その翌日か翌々日かわかりませんが、新しい命令が出ます。それは、学校の側に転がっている死体を焼くというわけです。

担架を持ってきて、手と足を持って「よしよ」と運ぼうとするでしょう。でも、ダメなんです。手はヌルッとむけて、白い骨になるわけですね。足もそうです。ヌルッとむけてしまうわけです。ですから、私たちは胴体に縄を巻いて、道路の上をズルズルズルズル引っぱって行って、土手の上に積み上げて焼きました。毎日死体を焼く臭いがたちこめてきました。

(5) うじ虫をとる救護活動

それから、割り箸、缶詰の缶カンの大きいのをもらって、「仁保小学校(地図⑮)に救護活動に行け」と言われました。救護というのは何をするのかと言いますと、うじ虫を取る仕事なんですね。

講堂に入っていきますと、被爆者がズラッと座っています。そして、講堂の中じゅうがウォンウォンウォンウォンうめき声でいっぱいでした。そして、熱い空気、放射線、血膿の臭いがムーンと襲いかかってきます。もう我慢の限界を超えた臭いがくるわけですけど、中に入りました。

怪我をしたところにうじ虫がわいて、肉を食いちぎりが

ら、穴ぼこに向かって、例えば耳に向かって進んで行く。患者は痛い。痛いからうめいているわけですね。そのうじ虫を割り箸で缶カンの中に取りっていきます。どんどん取って、もうないかなと思ったら、穴ぼこから大きなうじ虫が出てくるのでそれを引っぱり出す。そういう事をやりました。

そして、次の人に行きますと、包帯を巻いてもらってるんですが、包帯が用をなしてないんです。包帯の四方から、うじ虫がポロポロポロポロ落ちてるわけですから。私は、包帯に手をかけてめぐりましたけれど、そのめぐった時、頭の上に無数のうじ虫がたむろしているのをね、あの姿をかき消すことはできません。もう鮮明に頭の中に焼きついております。

(6) 黒焦げの満員電車

更に、伝令をやりました。伝達をする仕事です。

八丁堀(地図⑯)を通る。そうするとですね、八丁堀の電車が黒焦げに焼かれているわけです。黒焦げに焼かれた満員電車の中に黒焦げの死体がぶら下がっている。

伝達というのは、グループで行きます。近づいて行って友だちがドンと蹴ると、黒い死体がドロドロッと下に落ちる。それでもまだぶら下がっている。今度は私が行ってドンと蹴ると、またドロドロッと下に落ちる。それでもまだぶら下がっている。そこを平然と通っていきます。もうみんな正常じゃないわけですね。狂ってしまってるんです。この黒焦げの死体がドロドロッと、ドロドロッと下に落ちるあの音、あの姿、これも目に焼きついております。

(7) 後輩を担架で福山へ、そして自宅へ

ここに後輩の学校(地図⑰)がありました。私は昭和17年に師範学校に入るわけですけども、そのときは、この校舎で勉強をしていて、寮もここにあったわけです。今は南区役所、南区民文化センターになっております。

ここに、北村君という後輩がいました。全身に熱線を浴び、もう助からないかもわからないということで、田舎に連れて帰りました。私は福山の出身ですから、福山の出身が4人集められて、「お前たち4人は、北村君を至急、田舎に連れて帰れ」と。いつ動くかわからない汽車に乗せて、福山で降りて担架を担いで神辺町の北村君の家に届けました。

おじいさん、おばあさん、お母さんが出てきて、止めどもなく涙を流し、「ありがとう、ありがとう」と感謝されました。そして、私たちが、助かるかなと思って北村君の顔を覗いていたら、お母さんがお米だけのご飯を炊いておむすびを作ってくれました。

この時は嬉しかったですよ。私たちはね、あの当時、お

米を食べたことがない。何を食べていたかという、サツマイモを切って乾かしますでしょう。それを木で突いて大量の芋の粉を作ります。そこに小麦粉をぶっこんで、かき混ぜて、蒸団子のようにしたのが1食に1個だけ。おかずは、たくあんが2切れ置いてあるだけ。それを食べなかったら食べる物がありません。ですから、なめるようにおむすびを食べた。そして、4人とも北村君家へ泊めてもらいました。

翌朝、ダァーと下痢です。皆さんは信じられないと言われるかも知れませんが、私たちのお腹はその当時、お米のように栄養のあるものを受け付けることができない。下痢でダァーと吐き出してしまいました。

四つんばいになるようにして、私は田舎に帰りました。そして、畳の上に横になったら夢遊病者。おふくろは、必死になって介護してくれましたけれど、どうすることもできない。1週間ほどたった時、私の短い髪の毛は、枕が真っ黒くなるように全部抜けていたそうです。

私が甦ることができたのは、やっぱり、音楽のおかげでした。親父が、小さな子どもの時に音楽を聴かせてくれて、私は音楽の大好きな少年になりました。その音楽のおかげで、甦ることができました。

2週間目の中ほどに、親父が、「今日は、息子が長い間、聴こうにも聴けなかった西洋のクラシックの放送がある」ということを知りまして、ラジオのスイッチを入れてくれました。私はいつも通り寝ころがったまま。すると、この耳に、長いこと聴く事ができなかった音楽が届いてきたんです。

忘れることはできません。モーツァルトの「フィガロの結婚」の序曲でした。この音楽が耳の中に流れてくるなかで、私の身体の中に、なんだか力がみなぎってきました。おもゆを、おかゆを食べ、柱を掴まえて立ち上がり、そして、歩くことができるようになりました。

(8)再び学校へ、その時の川・海の恐ろしい光景

そして9月10何日、残念ながら、「学校に帰って来い」と言う新しい命令が出てきました。学校を復興しないといけませんから。

私はリュックサックの中に食べるものをいっぱい入れてもらい、広島駅で降りて、そのリュックサックを背負って猿候川(地図⑱)まで歩いてきました。この猿候川の土手に立った時に、私は歩けなくなった。それは、猿候川の水面一面に死体が浮いていたんです。

その死体は、牛や馬の胴体のようにパンパンにはちきれんばかりに膨らんでいる。服はついていない。どの死体も裸。その死体が水面一面にズラーと並んでいる姿を目にしたらですね、私は恐ろしくなって歩けなくなっちゃったんです。じっとそこへ立ち止まってですね、その姿をずっと長い間見ました。誰も助けに来ないんです、その死

体をね。そりゃそうです。広島街の中にそれを助けるような人は一人も残ってないわけですから。

その亡骸がどうなったのかを、私は一番言い残しておきたいのです。

私が帰った後の9月17日、枕崎台風が広島街を襲ったんです。この枕崎台風というのは、被爆後、広島を襲ったもっとも大きな台風のひとつと考えていただきたい。その枕崎台風の結果、この川に浮かんで、潮が満ちたら川上に、潮が引いたら海に向かって、押し流されていた亡骸が、川の砂底深く、海の砂底深くに埋まってしまった。私たちの目に届かなくなってしまった。

それから、70年経ったのですが、私は広島川の砂底深くから被爆者の亡骸を掘り出して吊ったという話を一度も聞いたことがありません。土の下の骨は、骨で出てきますが、水底の亡骸は、骨まで朽ち果てて出てきません。そのまま放つたらかしのまま、今日を迎えているのです。

広島街を流れている川の砂底、海の砂底深くには、今なお、無数の被爆者が静かに眠っています。そのことを、私は皆さんに一番言い残しておきたい。皆さんから伝えていただきたいのですよ。私はその姿を見えていますから。

証明するものが出てきます。私は、川でたくさんの発見をしました。「中」という陶器のボタン。原爆瓦を掘り出すときに、子どもたちが「先生あつたよ」と持ってきました。この「中」というのは、中学生の事なんです。戦争中の中学生は、金のボタンを全部ちよん切って、鉄砲の弾にした代わりに、陶器の瀬戸物のボタンをここへつけていたんです。この瀬戸物のボタンが砂底から出てくるんですよ。

「僕たちはここで眠っていますよ」って、証明するものとして。

◆「ヒロシマの心」

最後に、もう二つ言わせてください。

当時、どんどん被爆者が逃げていきます。この軍港宇品港船舶司令部(地図⑲)に逃げて行ったら助けてもらえろと思ひ、何万人という人が、司令部めがけて逃げてきました。その中の1万人が、似島(地図⑳)の検疫所に送られました。検疫所には、軍隊のお医者さんがいますし、薬があるからです。そして、8月25日検疫所が閉鎖されて、兵隊さんがいなくなります。その時に、この軍港宇品港に帰ってきた被爆者の数は500人でした。1万人引く500人は9,500人になります。

じゃあ、9,500人はどうなったの？この歴史が似島の歴史なんです。私は2013年度の日教組平和集会で似島を案内させていただきました。

26年後の昭和46年、この検疫所の後に、似島中

学校が鉄筋コンクリートで新しく建てられました。運動場の土を整備しておりましたら、運動場の土の下から四体の頭蓋骨が出てきた。そこで、広島市に掘ってもらったら、運動場の土の下から617体の亡骸が掘り出されたわけです。その後、似島の馬匹検疫所の焼却炉の下からも、スコップ300杯分の被爆者の亡骸が掘り出されていく。次々と掘り出されて、今もなお、土の下には無数の被爆者が眠っているということです。

もう一つ言わせていただきます。今の平和公園辺りは、昭和24年はまだ至るところに黒い地面がむき出しの状況でした。そこに、平和公園を造る丹下健三という建築家がやって来て立つわけです。そして、「この場所は死臭のただよう、異様な雰囲気のある場所である」と、手記を残しております。こういう黒焦げの町々、中島本町、天神町、材木町を平和公園にしたわけですね。

ここは、昭和24年から27年まで、トラックで土を運んできて埋め尽くして造られました。運転手の人土を下ろす時に、町々の小さな供養塔を引っこ抜きました。その供養塔の下に眠っている遺骨を掘り出さないまま、土を下ろしている所があるわけです。従って、皆さんが歩かれる平和公園のどこの土の下に被爆者の亡骸が眠っているかわからない。これが、平和公園でございます。

資料14:「組写真 ヒロシマ・ナガサキ」



広島 撮影:1952年7月30日 / 中国新聞社提供
ヒロシマは終わっていない — 郊外に土葬されていた遺骨が被爆後7年めに発掘された

すなわち、広島は街は屍の街でございます。屍の街の上に、幻のように今、現代都市が生まれているわけです。この現代都市広島の下に屍の街が漂い横たわっているということ、何とかして子どもたちに伝えていかないと、この世界で初めての出来事を本当に大きな問題として捉えていく人間になってくれない、と思うのです。

そして、これが核兵器の姿でございます。このような核兵器を、地球上に一発たりとも置いてはならないという心を、人々はカタカナの「ヒロシマの心」と呼んでおります。

私は、今日「ヒロシマの心」を、皆さんに少しでも伝えることができたら嬉しいと思って、時間いっぱい話をさせていただきました。これで終わらせていただきます。



「組写真 ヒロシマ・ナガサキ」

制作 日本教職員組合
編集 日本教職員組合
広島県原爆被爆教職員会の会
長崎県原爆被爆教職員会の会
広島教組原爆被爆教職員会の会
広島県教職員組合
長崎県教職員組合
広島県高等学校教職員組合
協力 広島平和記念資料館
広島平和文化センター
長崎国際文化会館
発行 日本教職員組合
広島平和教育研究所
広島県教育用品(株)